

THE HERO SHOW AIR

正義のヒロインと悪の女幹部が
生中継のポロリするようです

story works by
酒井仁
illust works by
SAIPACo.

立ち読み版



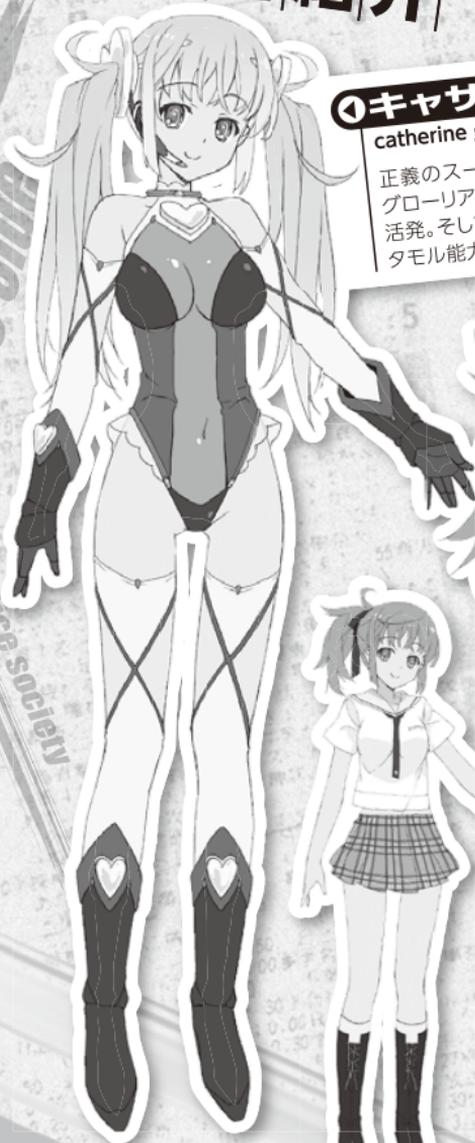
CHARACTERS

出演者紹介

① キャサリン・グレイス

catherine grace

正義のスーパーヒロインになるため、シティグローリアへとやってきた少女。性格は明るく活発。そしてエッチな知識には疎い。固有のメタモル能力(特殊能力)は怪力。



キレ
デ
バ
ド
ル

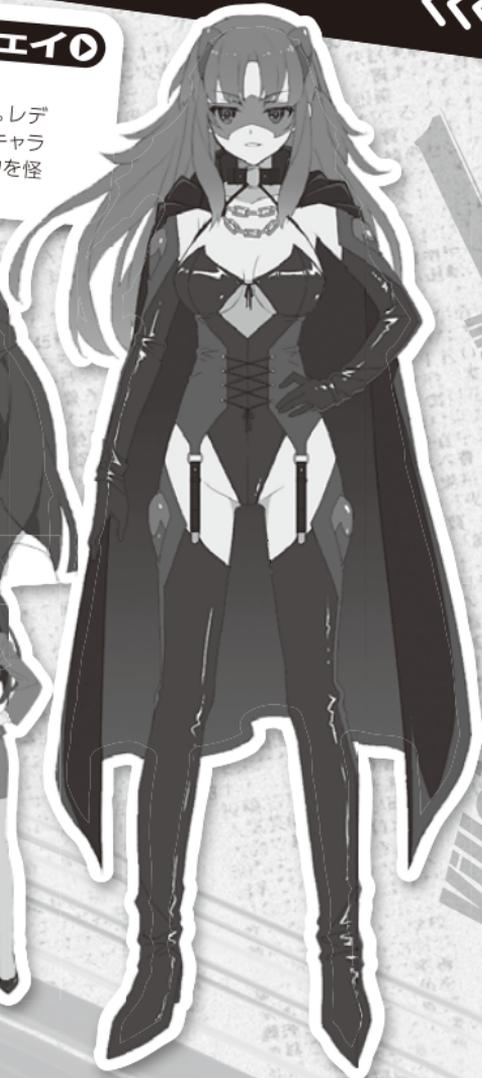
Hero Sida
super justice society



マキ・城崎・ダナウェイ

maki shirosaki dunaway

犯罪組織メタパラノイアの元幹部。レディ・ベラドンナの時には高慢な悪者キャラだが、普段はおとなしく真面目。動物を怪人化し、意のままに操る能力を使う。



ベラ
ドンナ

meta-paranoia

Villain Side



敏腕女
プロデューサー

ナタリー・ヘントマン

natalie hentman

[ザ・ヒーロー・ショー・A]を担当する、グローリアTVの敏腕女プロデューサー。

*出演者は変更になる場合がございますので、あらかじめご了承ください。

「言葉くらいでおたおたしてどうするのよ。これからあんたは視聴者の見ている前で、そのおま○こそのものを体験するんだから」

「ど、どういう意味……ひいつ？」

新たな感触に悲鳴を上げるキティ。

下着の上から股間に鼻面を擦りつけていた怪人の鋭い牙が布地を切り裂いたのだ。

少女の肌には髪の毛ほどの傷もつけられていないが、これでとうとう乙女の秘密の花園は一切の遮蔽物を失ってしまった。

平らな腹部から続く土手のなだらかなライン。

きゅつとくぼんだ下肢の付け根の丘陵を彩る茂みは、髪と同じ鮮やかなピンク色。普段の地毛は茶髪だが、ヒーローに変身すると同時にメタモルの影響で髪の色が変化するのだ。

「ほおーらほら、大開脚でおま○こ大放出よ〜」

大股開きされた乙女の秘裂の可憐さに、ベラドンナも思わず息を呑む。

ぴったりと合わさった肉溝から微かに覗く薄桃色の肉ひだは、艶やかに湿っている。明らかにいまだ汚れけがを知らぬ純潔の肉唇だ。

「くく、ネンネ娘でもおま○こはちゃんと成長してるじゃないの」

「いやああああああ、このっ、ド変態女に、ド変態猫おお！ いやあ、見ちゃだめええええ」

ダメと言われてそれを撮影しないのはプロの仕事ではない。

バトルの舞台となる街のあちこちにいくつも備えつけられたテレビカメラは、非情にも丸出しにされた少女の局部をズームで捉え、モザイク抜きの一部始終をお茶の間に流していたのだ。

ただし、この番組は局と特別視聴契約をした成人だけが見られる、未成年者お断りの完全アダルト向け番組である。

「視聴率、さらに上がりました！」

「よくしよし、まだまだイケるわ。七番カメラ、背後からじゃなくもう少しアオリで！六番と二番はできるだけ接近して、ああ、局部のアップは避けて！九番！ベラドンナの顔舐めでキティの歪んだ表情捉えて！」

（ど、どうしよう……格好が気になって、思うように力が入らない……ううん、それだけじゃない。お股やおっぱいを弄られるたび、身体が熱くなったり、ふわふわしたり、これといったなんなの……？）

そうこうしているうちにも、怪人と女幹部の愛撫は容赦なく続けられる。

しかし、ここで右手と右足を掴んでいる怪人——股間に顔を突っ込んでいない方の怪

人の力が、ほんのわずか緩んでいることに気付いた。

「ぐるぐる……ごろごろ……ふぎやあつ！」

怪人はもう一匹ばかりがキティの股ぐらを舐めていることに苛立ちを覚えているようだ。早く代われと言わんばかりにちよっかいを出しては、鼻面を邪険にはらわれ、不満げな声を漏らしている。そのせいでキティを拘束する手がおろそかになっているのだ。

(しめた、もう少し緩んだところでフルパワーで振り払えば！ そうすれば当たるを幸い、ぼっこぼこにしてやるんだから！)

少女は反撃の策を巡らせながら、抵抗を諦めたふりをする。

「あらあら、もうへばっちゃったのかしら？ それでヒーローだなんて、笑っちゃうわね
っ」

(なんとでも言いなさい、ここからあたしのスーパー華麗な逆転ショウをみんなに見てもらうんだから！)

呼吸を計り、メタモルを活性化するチャンスをうかがうキティ。そして。

(今だ———！)

少女の細胞に眠る特殊因子、メタモルが一気に活性化し、筋力を何倍にも跳ね上げる。

少女の腕から生み出されるとは思えない怪力が怪人の拘束を振り払うや、必殺のアイアンクローが怪人の腹部を捕らえた！

——かに見えたが、キティの手は何か違う別のものを思いつきり掴んでいた。

「ふにやはあ~~~~んんっ」

身体の一部をむんずと掴まれた怪人が、なんとも心地よさげな声を漏らす。

「へ……？ なにこの、ぐにゃつとしたような、それでいて硬い芯の入った棒みたいな、毛皮に包まれたふにした………」

「にゃふうう~~~~んんっ」

腹部ならぬ下腹部でキティが掴んでいたのは、猫怪人の股間。否、オス猫が当然そこに持っているであろう「男のシンボル」。

「ごろごろごろ……にゃううん」

「あら、自分からちんぽを握りにいくなんて、意外に大胆ね。ヴァージンのくせに」

「ちっ、ちちっ、ちんっ、ちんっ」

あまりの出来事に、キティは手を放すことも忘れて硬直してしまう。その手の中で怪人の局部は「むくくっ」とさらに膨張し始めた。

「な、な、な……なにこれっ、なにっ」

それが怪人の男性器であるという事は理解している。

だが、処女の心がどうしてもそれを認めることができないのだ。

（うんとちっちゃい頃にパパのおちんちんなら見たことあるような……でも、あんまり覚

えてないし！　ていうか何このグロ映像！　なんでこんな、よきって上向いてんのお！
鋼鉄の芯が入っているかのような硬さ、そしてぶなぶなとした皮の感触。そして何より
手のひらに感じる異様な熱さは、とても生き物の一部とは思えない奇妙さだ。

ペニスを握ったままの少女に猫怪人は興奮の度合いを増したようで、ざらざらした舌を
膣穴にねじり込む勢いでねぶり回す。

「ふぎやあああ、ぎにやあああんっ」

「やつ、ちよ……ひい、気持ち悪い！」

ハッと我に返り、握っていたものから手を放す。

「そんなこと言っちゃかわいそうよ。この子たちはオスの本能に従ってるだけなんだから」
「ほ、本能？」

「そうよ、と悪の女幹部は再び自由を奪われてしまったキティに悪辣な笑みを向ける。

「決まってるでしょう、メスを犯して子種を注ぎ、孕ませるのよ」

「は、はらませ……る……？」

「そう、妊娠させるの、受精させるの、オスの精子とメスの卵子を結合させて赤ちゃんを
お腹に宿らせるのよ！」

「ほか……んと呆けていた少女の顔から、徐々に血の気が失せていく。

この怪人たちが、自分に対して何をしようとしているのか、自分がどういうピンチに陥

っているのかを、ようやく理解したのだ。

すなわち、「貞操の危機」。

「いっ」

半裸に剥かれても、愛撫されても決して味わうことのなかった恐怖を、キティは初めて知った。

「いやあああああああああああ！」

スーパーヒロインであることを忘れた哀れな絶叫に、ベラドンナは高らかに嘲笑するのだった。

たとえば、従来のヒーローショーの場合。

銀行強盗を追いかけていたスーパーヒーローが、強盗団を取り逃がす時がある。

あるいは強盗団の中にメタモルがいてバトルになり、あ敢えなく返り討ちに遭ってしまうこともないわけではない。

敗北したヒーローは評判を落とし、「スーパージャスティス協会」のヒーローランキングを落としてしまう。協会からはヒーローへの報奨金などは一切出ないが、ランキング上位のヒーローは企業スポンサーがついたり、CMに出演する機会が増える。

故ゆえにヒーローはランキングを上げるために悪と戦い、シティグロリアの正義と平和と

自らの評判を守ることに精力を注ぐというわけだ。

だが——今完全生中継中の「ザ・ヒーローショウ・A」は状況がまるで違っていた。
「ぐるぐる……ごろごろごろ」

「んーっ！ んむうううーっっ！」

レディ・ベラドンナの生み出した強化猫怪人に捕らえられてしまったスーパーヒロイン、セイバードール・キティは、貧民街のビルの屋上にぺたんんと座り込み、左右から猫怪人に拘束されている。

そのつんとこまっしやくくれた美貌に、赤黒い肉棒が押しつけられ、我先に唇に突っ込もうと怪人たちは腰をカクカクさせている。

「んむううう、んっ、んううー！」

本当なら罵声を浴びせたいところだが、そんなことをすれば怪人の勃起ペニスを啜えさせられてしまう。本当は異臭を放つ男根を押しつけられるだけで嘔吐しそうなのだ。

(ひいひい、気持ち悪いきもちわるい気持ち悪いひいひいッ！ なんでこいつらっ、おちんち……こんな臭くて汚いものをあたしに啜えさせようとしているのよおっ？)

しかし怪人たちの力は強く、腕を掴まれては逃げることもできない。

「あらあら、いいかげんに観念して、ちんぽおしゃぶりしちゃったらどう？」
「んうううう！ んっ、んふう……ッ」

背後から抱きすくめるように腕を回し、ベラドンナがキティの乳房を愛撫する。その大人のテクニックで少女のニップルはすでに開発され。今ははつきりとした快感をキティにもたらしめている。

だが、このまま流されてしまうわけにはいかない。反撃のチャンスをうかがう少女に、悪の女幹部はさらに絶望的なことを囁いてくる。

「拒み続けるのは自由だけど……そうなるとこの子たち、本当にあなたと交尾しなきゃ収まらなくなるわよお……？」

「むふう!!」

「そおんなにビンビンにおっ立てたおちんちん、今さら収まるわけがないでしょう？ 今私は私が抑えてるけど、本当はこの子たち、あなたのヴァージンヴァギナにぶち込んで、赤ちゃんの素を注ぎ込みたがってるのよ？」

そう、ベラドンナは動物を怪人化させ、意のままに操ることができる。

猫怪人たちの性衝動をあえて抑えさせ、その代わりにキティの唇を犯させようとしているのだ。

「あなたがお口でヌイてあげたら、その子たちも満足するかもしれないわよ……」
そう言ってくりくりと乳首をこね回す。

「……………」

頑かたくなに口を閉じていたキテイが、恐る恐るベラドンナを振り返る。

「……ほ、ホント、に……?」

肩をすくめる女幹部に、スーパーヒロインは真剣に悩まざるを得ない。

(ど、どうしたらいいの……ここは正義のヒロインとして……でも……いや、けどけど……あああ、もおどうしていいかわかんないっ。け、けど……)

いや、これはあくまでも作戦。

あえて口を使つて勃起を収め本来の攻撃をかわす、いわば「肉を斬らせて骨を断つ」高度な頭脳プレイなのだ。

……と、無理やり自分を納得させようとするものの、目の前に迫る獣ペニスのグロテスクさと異臭に嘔吐感が込み上げ、ますます混乱してしまう。

(うううう臭いくさい臭い、なんかほっぺにねちよねちよした液が当たってるうう。こんなにくわうえるとか無理、マジあり得ないいいい!)

しかし発情した猫怪人は我慢を切らしたように、キテイの頬をいきなり掴み上げた。

不意を突かれた正義のヒロインの唇を割つて、勃起ペニスが一気に押し込まれる。

「あもっ……んっ、んふうううっ?」

「ふにやおおんんっつっ」

ずぶりっ、と一気に幹の半分ほどを呑み込まれた猫怪人が、快美の声を漏らす。

ぬめぬめとした乙女の口内はさぞや心地よいのだろうが、唾え込んだキティは口いっばいに詰め込まれた男根の臭気に目を白黒させていた。

（うええつ、く、臭いッッ！ しかもしょっぱくて変な味……い、息ができない……ッ）
唾えているだけで精いっぱいなのに、怪人はよほど気持ちよいのか、キティの頭を大きな手でむんずと掴むと、遠慮もなく腰を振り立て始めたのだ。

「ふにやあんつ、にやごつ、にやごつ」

「んもお、んぶつ、んむううううっ！」

じゅっぶじゅっぶと唾液が唇の端からこぼれ、胸元に滴り落ちる。

喉奥を突かれる苦しみに猛烈な嘔吐感が込み上げるが、頭を押さえられているので吐き出すこともできない。

生まれて初めてのイラマチオは、少女がこれまで受けてきたどんな訓練よりも苦しかった。

（うぐ……う……おつきくて太い棒が、の、喉の奥にまで……ぐうううっ。あ、頭押さえつけられて、い、息ができない……っ！）

怪人はそんなことなどお構いなしに、ぐいぐいと腰をグラインドさせてくる。子供の握り拳ほどもあるうかという亀頭が容赦なく喉奥に突っ込まれ、キティの気道を塞ぎに来る。その必死なまでの腰の振り立てようは滑稽なほどだが、少女にその滑稽さを笑う余裕な

どあるはずもない。

(こ、こいつらなんでこんな……あ、顎が外れるうううつ。こんなんじや殴られたり蹴られたりする方がまだマシよおおつ)

学校で習う性教育程度の知識しかない彼女にとつて、怪人の行為がイラマチオという、口を使った性行為の代替行為であるということも、よく理解していないのだ。

ただ、デビューしたばかりのヒーローとして、為す術もなくやられている自分が腹立たしく、悔しく感じられた。

「ぐるにやあああつ！」

と、腰を振っていた怪人がどんと突き飛ばされ、肉棒がずるつとキティの口から抜ける。もう一匹の猫怪人が仲間を押しつけ、今度は自分のペニスをしやぶらせようとする。呼吸困難でふらふらのキティは、それを受け入れるしかない。

「やだつ、ちよ、今度は何を……えつまたそんな太いの……むぐううつ」

新たな陰茎が力任せにずぶずぶと少女の口内にねじ込まれる。

さっきのペニスは口粘膜で擦られてほとんど異臭がなくなりかけていたが、新たに啜え込んだこれはまた一段と臭く、苦しよっぱい。

「んぐ、んむ……おええつ、おちんちんつて、ま、不味^{まず}う……れろつ、あんたたち野良だから、ろくに身体も洗ってないんでしょ……うええ、臭いっ、れるっ、ちゅむっ」



つま先が浮き上がらんばかりの強烈な挿入に、ベラドンナはばくばくと口を開け閉めするばかり。

ギャレットは「ずぬぬっ」と肉幹の半分ほどを引き抜くと、再び「じゅぷぷっ」と根元までねじ入れる。

「ぐふうっ、げほ、けほっ！ ちよっ、やめ」

「んほおおお、ぐほおおおおっ」

ずぶぶっ、ずぬぬぬっ、じゅぶぶっ。

歯止めの利かない蒸気機関車のごとき勢いで腰を振り立て、ギャレットは文字通り怪人級のパワーとスピードでベラドンナを犯し続ける。

「ひっ、ひいい、ひああああっ！ やめ、やめ、なさ、いいいいああああ」

これは、SOKO||AGEシステムの暴走で猫怪人のコントロールが利かなくなった状況に酷似している。

しかし今ベラドンナはSOKO||AGEシステムを使っではない。

（や……やっぱり人間を怪人化するのに無理があつたの？ ギャレットの性本能だけが強化されて、きつと本人にも抑えられてない……）

「ぐおおっ、ぐほっ、ぬごおおお」

自分を逆恨みしているかつての部下に犯されるのは屈辱だが、現状はもつと最悪だ。

暴走怪人と化したギャレットは性欲だけに支配された獣となって、ただ目の前の女体を貪り尽くすことしか考えていない。

ベラドンナの二の腕を掴むと、腰をすくい上げるようにピストンを叩きつけてくる。突き上げられた子宮が腹膜を内側から膨らませる。

「うおおおん、うおおおおお〜んっ！」

ぼごっ、ぼごごっ、ずぶぶうっ。

(い、いけない……こんな、このままじゃ)

すでに両のつま先はビル屋上の床についておらず、ベラドンナの身体は股間を犯すギャレットの巨竿だけで支えられている。

だが、真の危機は陵辱の激しさにあるのではない。常識外れの巨根、常識外のピストン、想像の域を超えた荒淫を、成熟した女体が受け入れ始めているという「事実」。

「うごおおおおおおおお」

「ひっ、ひいっ。い、いっ！ だめっ、そんな、は、激しすぎ……ッッ！」

これだけは、何があっても避けなければならぬ事態だった。

好きでもない、いや軽蔑の対象でしかない最低の性犯罪者に力づくでレイプされ、それなのに快楽に吞まれてよがってしまうなんて。

「あひいん、し、子宮に響く……おつきくて、長すぎるうっっ」

認めたくないことだったが、ギャレットが喝破したのはまぎれもない事実だった。

S Mの女王様のように高慢に振る舞っていたベラドンナが、実はマゾ気質だということ。椅子に拘束されて股間を刷毛車で嬲りものにされ、パイズリでさんざん乳房を弄られ、けれどそんな仕打ちに身体を疼かせていたということ。

(わ、私は……こんな、レイプされて……しかもテレビでそれを流されてるのに……それが、気持ちいいなんて……っっ！)

認めてしまうと同時に、どつと愉悦の波が押し寄せてくる。

それはベラドンナの神経を焼き焦がしながら全身を駆け巡り、アクメの電流が脳髄に駆け上がり、そこではじけた。

「くひい………ッッ！」

びくっ、びくっと身体が勝手に跳ね上がり、舌を突き出して声もなく悶える。

いっばいに詰め込まれた巨根を膣肉が締め上げ、それがもたらす快感にギャレットが咆哮する。ぶるるとその腰が震え、男と女の交接部分から白い液体が勢いよく噴きこぼれる。

「うぐうおおおおおお」

ぶしゃっ、ぶしゃっ、びちゃあっ。

「ひいひいんっ、なっ、中を出てるッ、ザーメン熱い、熱いのいっばいっ」

猫怪人の精液と違い、相手は人間の精液、運悪くギャレットの子を孕んでしまうかもしれない。

死ぬほどおぞましい行為、しかも種付けの一部始終を生中継されているというのに、ベラドンナは込み上げる愉悦を抑えきれない。

（お腹に、ザーメンが満ちていくのがわかる……妊娠するかもしれない、のに……それなのに、また、イッチャウ……ッツ）

「ベ……ベラドン、ナ……」

まさかのギャレットの怪人化と拘束からの脱出、しかしギャレットは暴走し、主人であるはずのベラドンナを立ちバックで猛然と犯し続ける。

目の前の光景にキティは唾然とするしかない。

「くくく、あの強姦魔を味方につけた時はびっくりしましたが、所詮三流犯罪者は三流ということですなえ〜」

「ッ！」

キティの隙をついたグッドウィンが、股間を掴んでいたキティの手をパシッと払いのける。

と同時に、尻肉に指を食い込ませると「女を強制的に感じさせるメタモル」をキティに

叩き込んでくる。たちまち猛烈な快感が込み上げてきて、少女は「あぁっ」と司会者席に突っ伏してしまふ。

「さて、仔猫ちゃん……ずいぶんふざけた真似をしてくれたじゃないか。あのスベタともども、キミにもお仕置が必要のようだね」

「くう、あ、あひいっ」

グッドウインのメタモルの力がキティの快楽中枢を無理やり活性化させる。がくがくと膝が震え、膣奥に「じゅわっ」と蜜液が溢れる。

「ペラドンナも三流ならキミも三流ヒーロー、自分の分ぶというものをわからせてやらないとね。だが安心したまえ、ボクはキミのような小便臭い小娘に興味はない」

空いた方の手でピンクのツイントールを掴み上げると、グッドウインはキティを司会者席から引きずってペラドンナたちに近づいていく。

「ううっ、あっ!」

「さあ、こつちに来るんだ! おお、あちらもまた盛り上がってるじゃないですか」

キティが顔を上げると、目の前でギャレットが再び腰を振り立ててペラドンナを立ちバツクで激しく犯している。

「ふんぬおっ、ぬおおんっ!」

「あひ、はひいっ。そ、そんなとこ……だめええええっ」

(あ、れ……でもなんかさつきと、違う……?)

「おやおや、これはすごい。ま○こではなくケツ穴調教ですか。ほら見てご覧なさい仔猫ちゃん」

キティが違和感を覚えたのも道理、ギャレットはさつきよりもずいぶん上に向けて下腹部を叩きつけている。

位置的にそれはヴァギナではなくアヌス……すなわちベラドンナは肛門を巨根で犯されていたのだ。

「ふおっ、ぬおおっ！ うがあああああ」

しかもピストンの勢いは増していく一方。あまりにも激しい前後運動にベラドンナは壊れた人形のように手足を投げ出し、為す術もなく猛烈なピストンに晒されている。

(そ、それなのに……なんであんなに気持ちよさそうな顔してんのよ)

「ふひいひいッ、お尻そんなに、だめええ、気持ちよくておかしくなるうう」
「うごおうっ」

ギャレットの肥大した腕が女体を持ち上げ、「ずぶんっ」と菊門から肉棒を引き抜く。

そして尻穴を掘削していた凶器を膣穴にねじ込み、子宮を押しつぶさんばかりに突き上げる。

肉の合わせ目から泡立った体液がこぼれ、床にびちゃりとまき散らされる。

「あぁっ、おま〇こおっ」

ずぼおっ。

「はぁん、今度はお尻いつ」

ぬぶぶぶっ。

「ま、またおま〇こにいつ」

あり余る性欲のままに腰を振り立て、ギャレットはベラドンナのヴァギナとアヌスを交互に突き始めていた。

「な、なんて男、なんて腰の動きだ……」

ヴァギナに挿入し子宮を突き上げ、ヴァギナから引き抜いた肉棒をアヌスに根元までねじ入れる。

そして今度は尻穴を激しく擦りながら引き抜き、すかさずヴァギナに突撃する。律儀に前、後ろ、前、後ろと突き続けるその動きにまったく淀みがない。

「あひいい、くううんっ！ どっちもなんてっ、あ、悪の女幹部の私が、こんな、あぁあんっ！」

ベラドンナはただその凄まじい自慰ピストンに身を任せているだけでよかった。

怪人化、そして暴走状態のギャレットはベラドンナの二穴を犯すことしか考えていない、ただの腰フリマシーンと化している。

グッドウインの手がキティの後頭部を押さえつけ、女幹部に近づける。

「はあ、はあ……ん。キ、キティ……わらし……へ、変になりそう……なのぉ」

「ちよ、あんた、しつかりし、んうっ」

とろんとろけきったまなざしのまま、ベラドンナはキティに抱きついてくる。そして唇を割って舌を差し入れてきた。

「んう……んあ、あ……んちゅっ、れる……」

ちゅくちゅくと舌を絡め、唾液を交わらせ、正義のヒロインと悪の女幹部は濃厚なディープキスを交わす。

ただそれだけのことなのに、キティは子宮がきゅつと疼き、熱を帯びるのを感じる。

「ふあ、あ……あ、あたしまで、なんかきもちい」

「んふううんっ、もっとお、れる、むちゅううっ」

ベラドンナの身体はギャレットのザーメンでべとべとだが、そんなことはちつとも気にならない。

互いの身体に腕を回し、人が変わったように唇を貪りあう美女と美少女。

その背後では鬼神のごとき勢いで腰を振り立てるギャレット、そしてにやにや成り行きを見守りながらキティの尻を揉むグッドウイン。

「れる、むちゅ、んっ、ああんっ。こんな奴に、レイプされて、い、イカされるなんてえ



尋常ではない射精量は、あるいはそれも怪人化の影響なのか——実に数分間放出し続けてから、ギャレットはようやくベラドンナの身体を離れた。

「ふあ……あ……あ……」

キティと抱きあったまま、ベラドンナはぐったりとザーメンプールにへたり込む。

壮絶なザーメンダブルノックアウトを前に、グッドウインはくふんと小馬鹿にしたように鼻を鳴らし、インカムからの指示に耳を傾ける。

「……ええ、視聴率は上々……それは何よりでした、ミス・ヘントマン。では本日のショウは以上ということだ」

ばしゃつ、とスポットライトが落ち、グッドウインはこきこきと肩の凝りをほぐしてから、葉巻を取り出し火を点ける。

「やれやれ、思ったほど楽な仕事ではなかったな。ゲストが本物の囚人とかどうなることかと思ったが、ギャレットとかいうのもたいしたことはないな。ベラドンナごときに手玉に取られるなど……」

多少のトラブルはあったが、まずまずの仕事をごなせたはずだ。紫煙をくゆらせつつ、世界的人気司会者はくると踵を返し、その場を立ち去つ——。

がしいつ。

「ひいひいひい~~~~ツツ」

一斉に飛びかかってきた男たちの手が、黒のコスチュームをはぎ取っていく。

あつという間に乳も尻も露出させられた半裸姿の女幹部は手足を押しさえつけられ、まぐり返しを強要される。

丸見えになった股間を覗き込む男の股間には、隆々とイチモツが屹立している。わかっていたとはいえ、これから自分が何をされるかを思うだけでベラドンナは総毛立つ。

「はいっ、罰ゲームは今から十五分間ですよ」

長い九百秒になりそうだ……うんざりする女幹部の膣に、最初の肉棒がねじり込まれた。

「はあ、はあ、はあ………や、やっと終わった」

「ええっつ、俺まだベラドンナちゃんに突っ込んでないぞお！」

ぶつくさ文句を言う男たちはスタッフに追い出され、ベラドンナは顔にもべつとりまき散らされた白い体液を指で拭う。

「さっそく小娘の後を追いたいところだけど……ねえ、タオルか何かないかしら？」

次のステージへの扉を指し示すスタッフにそう聞くが、スタッフはひよいと肩をすくめ首を振る。

「そのままでも問題ないと思いますよ？」

その言葉に不穏なものを感じつつ、すでにキティは十五分リードしていることを思い出す。

（この先もろくでもないアトラクションしかないってことか……次のステージを取られたら私の負けだし、先を急ぐしかないわね）

次の部屋はいたってシンプル。

ステージ上にはピンクの髪の少女が呆然と立ち尽くしている。床の上には犬の餌入れのような二つの皿が置かれ、白い「何か」が入っている。

「どうしました、キティさん？ そろそろサービスタイムが終わってしまいますよ」と、進行役の声がインカムから聞こえ、ルール説明を始める。

「これはバラエティでおなじみ、口だけで中の飴玉を取り出すゲームです！ そろそろサービスタイムが終わり、妨害が始まります、ベラドンナさんもお急ぎください」

「ああ、小麦粉の中に顔を突っ込んで飴を取り出すという子供じみたゲーム………つて、なんじゃこりやあああ………ッッ！」

キティの隣に立ったベラドンナの鼻孔を突く臭気は、さっきさんざん嗅がされた生臭さ。皿いっぱい溜まっているのは粉ではなく液体。どろりと粘っこい男性のザーメンがなみなみと注がれていたのだ。

「な、何十人分集めたのよ、なんて悪趣味……」

呆れ果てるベラドンナの隣で、正義のヒロインは青い顔をしている。

「ううう〜っ、き、気持ち悪いよう……もういやだぁ……………」

今にも泣きだしそうに顔を歪めるキティ。
これまで猫怪人だのグッドウィンだのに弄ばれてきたはずだが、やはり田舎育ちの純朴な少女は、この下品極まるゲームを前に心折れたようだ。

（ふん、世間知らずのお嬢ちゃんには刺激が強すぎたようね。悪いけどこのステージは勝たせてもらおうわよ！）

ベラドンナも決して男性経験豊富というわけではない。だが、少女の頃に両親に捨てられ、悪の組織で苦労してきたという自負もある。

「ええいつ、女は度胸〜〜ッッ！」

さっきのステージの罰ゲームの延長だと思えば、どうということはない。ベラドンナは四つん這いになると、すでにザーメンでべとべとになった顔を皿の中に突っ込んだ。

「うひい、ま、マジ!?!」

ドン引きしているキティに見せつけるように、女幹部は真っ白な体液の中で口を開け、舌で皿の底をまさぐる。

たちまち口中いっぱい流れ込んでくる苦しよっぱい体液と凄まじい臭気。

「んぐう……んぐ、んぐうっ」



これだけ大量のザーメンの中に顔を突っ込めば、どうしたってある程度飲み込んでしまふ。いがらっぽい味が食道を灼き、胃の奥がぐるぐると不快な音を立てる。

(こういうの見て、視聴者は喜ぶわけ？ ちっともつ、さっぱりわかんないけど、見たいんなら見せてあげるわよ、悪の女幹部の意地を！)

んぐんぐと舌を伸ばしていると、丸くて固いものを探り当てる。

「んぐ……ふはああつ！ けほ、けほけほんつ。と、取ったわよ！」

ぷつと飴玉を吐き出し、勝利宣言をするベラドンナ。気がつけば皿の中の白濁はずいぶん減ってしまっている。

「うえええ、あんなに飲んじやったの？ い、胃袋から妊娠しそう……」

「お見事です、ベラドンナさんまずは1ポイント先取！ 飴はあと四つです」

「はあつ!? ちょ……それに、何よあんなたち？」

ザーメンボウルに顔を突っ込んでいたので気がつかなかったが、二人の前にはいつの間にはずらりと覆面男たちが仁王立ちになって、イチモツをおっ立てている。

「ま、まさかあんなたちも」

「ウツス！ 今回の視聴者参加に応募したザーメン要員ツス！」

「ベラドンナ姐さん、いくらでも飲んでください、すぐに補給しますから！」

「よ、余計なことしないでよ！ んぷつ」

憤慨する女幹部の顔面と皿めがけ、陰茎から新たな白濁がほとばしる。

男たちの放出量は凄まじく、半分くらいに減っていたはずのベラドンナの皿に次々と男汁が追加されていく。

「うううう、搾りたては匂いが半端はんぱじゃない……」

勃起ペニスからいくらでも放たれる生精液に、キティは思わず後ずさる。しかし、少女の腰を別の腕ががしりと押さえつけてきた。

「駄目ですよ、試合放棄したらそこでキティさんの負けなんだから。むひひひ」

「こ、こらっ、お尻に変なもの押しつけないでっ」

尻や太もも、さらには乳房にまで手を伸ばし触りまくる男たちの一団は、ベラドンナの背後からも迫ってくる。

「いつまでもクリアできないと、このまま罰ゲームに突入だぜ？ まあ、俺らはそれでも別に構わないんだけど、ひっひひ」

（ち……こいつらは悪党でもない、ただの視聴者だから、叩きのめすこともできないってことか。考えたわねあの女プロデューサー）

「いやあああ、へ、変なとこさわらないでえ」

ピンクの髪の少女の方は、そこまで考えているというわけではなく、にたにた顔で痴漢行為をしてくる男たちの雰囲気につきり吞まれているようだ。

いつもの快活さが失われ、為す術もなく股間をまさぐられ、震えている。

(……かわいいそうだけど、これも勝負！ 恨みっこなしよ、セイバードール！)

これはいつものバトルではなく、あくまでもアトラクションゲームであり、競技。

腕っ節では勝てなくとも、このゲームならベラドンナにも勝機はある。尻をむんずと掴まれつつ、女幹部は大きく息を吸ってから、再びザーメンボウルに挑む。

「がぼっ！ んく、んくうううっっ」

「おおお、さすがはベラドンナ様だ！ よおし、俺たちも負けずにザーメン補給だぜ！」

「俺はキティちゃんのエッチ穴を弄って妨害だ！」

「お、俺は尻を……尻穴を……」

ただの痴漢変態集団と化した参加視聴者は、陰茎をしごいては白濁を追加し、キティの股間を指で抉り、強化スーツの上から乳首を掴み上げてくる。

「ひゃひっ、ひいん……おっぱい駄目ええ……」

先ほどのステージではキティが勝利したために罰ゲームを受けなかった。

その分、このステージではキティの身体を弄ぼうという男の数が若干多いようだ。

何本もの手に身体中をまさぐられ、少女は羞恥のあまり立っていられない。そのあどけない顔にも勃起ペニスが押しつけられる。

「ひひひっ、搾り取ったミルクが嫌なら、直接飲んでくれてもいいんだぜえ」

「んーっ！ んぐ、んむううう！」

キティの後頭部を押さえつけ、男は激しく腰をピストンさせる。

その腰には別の男が取りつき、前に回した手でスーツの上から肉唇をまさぐりながら、尻の割れ目に陰茎を押しつけ、擦りつけてくる。

「おほううっ、キティちゃんのおヒップ、ぷりっぷりんだぜ！ まるでヴァギナに突っ込んでるみたいに気持ちいいよっ」

「んくう、けほっ……気持ち悪い……きもちわるいからやめてえ……」

すっかり心が折れ、弱気になった少女ヒーローの泣き顔は、男たちの同情を誘うどころかかえってオスの嗜虐心に火を点ける。

もはやゲームそっちのけで少女の身体に群がり、腋と言わずふくらはぎと言わず、全身に勃起ペニスを押し当て、かくかくと猿のように腰を振る。

その横で、ベラドンナは痴漢行為にも負けずザーメンポウルに挑んでいる。

「んぐっ、ごきゅっ……ふはあっ！ こ、これで三つ目よ……げぷう」

「おおお、すげえ、どれだけ補給してもどんどん飲み干していく。ザーメンまみれの顔が最高に輝いてますよ、ベラドンナ様！」

「このちんぽミルク牛男どもが……これがっ、メタパラノイア幹部のど根性よおっ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 二次元ドリームノベルズは、未完の方購入して下さい。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!



3次元
12

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



魔法少女
12

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!



コミックプリズム
6

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!



メガミクライシス
Vol.8

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!

Valkyrie

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!